

新任の先生方より

メッセージ

「去年」から未来へ

教頭 柴山 希一

(四十八回卒)



よそしく、しっくりこないな
んとも不思議な感覚のまま、
数ヶ月が過ぎていきました。

月やあらぬ

春や昔の春なら

ぬわが身ひとつは

もとの身にして

ある朝、事務書類を抱えて
階段を上下しながら、この歌
のある「伊勢物語」第四段が
思い浮かび、業平の感じてい

この文章を書きつつ、下館
一高を離れていた十二年の歳
月を、「わずか」というべき
なのか、「久しい」というべ
きなのか、形容に迷ってしま
いました。自分がそのような
ことを感じる年齢になってし
まったこと自体にまず驚いて
いるのですが、ともかく十二
年の時を経て、再び同じ校舎
に通動することになりました。
しかし、かつて十年間勤務し
ていた学校であり、校庭も、
校舎も全く変わらず、生徒の
制服も同じであるのに、なか
なか元の学校に戻ったという
ような感覚がつかめません。
見るものすべてが、少しよそ

たのです。

階段を上りながら私の感じ
た「解離」に似た感覚は、か
つて十年間勤務していた学校
であり、建物も変わらないた
め、頭の中では、すぐものの
感覚に戻ってもおかしくはな
いと思いつつも、自分を囲む
人の顔ぶれが全く違っている
という人間関係の面での環境

の変化が、視覚を中心とした
私の身体感覚にも影響を及
ぼし、同じ校舎なのにかつて
の風景と違って感じさせてい
るところからきているのだろ
うと思ったのです。

かつて授業では、係助詞
「や」の疑問説と反語説の両
方を紹介し、諸説乱れてなか
なか決着がつかない難解な歌
であるが、疑問説がやや優勢
であるなどと説明してしまし
た。もし、「伊勢」の表現が
実際に業平が感じたであろう
感覚に最も忠実な表現である
とすれば、業平には、今私が
悩まされているこの「解離」
に似た奇妙な感覚が、何倍何
十倍もの強さで感じられてい
たのだろーと思えます。同じ
はずの月や春までもが全く違
ったものに見えてなんら不思議
はないと一人で納得し、同

じ高校に二度勤務する稀少な
経験からくる思わぬ発見に、
少し得をしたような気がしま
した。

何人も過去を引き戻すこと
はできないということに肝に
銘じ、私は昔の感覚を捨てて、
この新しい現実と向き合いな
がら日々やっていくしかない
と思いました。

たったの十二年の間に、下
館一高は単に人の顔ぶればか
りでなく、いろいろな意味で
大きく変わっていました。生
徒も先生方も授業や部活動に
前よりもひたむきに取り組ん
でいるように感じます。7ク
ラスになり、よく言えばスリ
ムに筋肉質に生まれ変わった
という印象です。事実、入学
時と卒業時を比較した学力の
伸びは他校よりすばらしく、
部活動においてもかなりの成
果をあげています。

以前、他校の先生からセン
ター試験会場での下館一高生
の強い目の輝きを賞賛された
ことがあります。下館一高
の最大の長は、常にフレキ
シブルに状況に対応できると
ころにあると思います。ただ、
少子化の時代にあって、他校
も様々な改革に取り組んでい

ますから、下館一高も現状に
満足することなく、将来を見
据えながら、さらに大胆に教
育の内容を改革し充実させて
いかねばならないだろうと思
います。今、私はそうした将
来の目標に向け、新しく出会
った先生方がたや生徒諸君と全
力で行き組みたいと考えてい
ます。

下館一高に赴任して

柴山 佳美

(六十二回卒)



「一日二十四時間じゃ足り
ない。」

と話している生徒とすれ違っ
た。入試を目前控え、達成す
べき目標とその時点での到達
度との差違に、せめてあと二
時間多ければと思っていた高
校時代を思い出した。

赴任後により強く感じる
ことは、「本校生は恵まれて
いる」ということである。勉
学や運動に励もうとするなら、

時間を惜しまず応えてくれる
先生方が、切磋琢磨し合える
友人がいる。その志を陰で支
えて下さる保護者の方々がい
らっしゃる。当たり前のこと
のように思えるかもしれない
が、私たちが思うその「当た
り前のこと」を享受できない
人が如何に多いことか。戦時
下で明日の命をわからず
人々。最貧国にもかかわらず
大災害に見舞われ生活のより
どころすらない人々。家族を
養うために渋滞している車の
列に飛び込み、物乞いをする
子どもたち。国策や様々な理
由から教育を受ける機会のない
女性たち。先進国と言われ
るこの日本でさえ、経済状況
の悪化から高校を去らなけれ
ばならない生徒がいるという
現実。

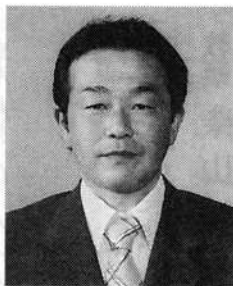
そのようなことを考えれば
考えるほど、与えられた環境
に感謝することもなく、ただ
ただ漫然と時を過ごすのは傲
慢であるように思えてならな
い。上を見ればきりがなが、
世に報いるために、自分もつ
ているものを最大限に活かす
努力を惜しまないことが今こ
の時代にここで生まれた者と
してできることなのではない

だろうか。自己を振り返ればそれほど高潔ではないし失敗も多いが、ことある毎に「精一杯努力しているか」を自分に問いかけ日々を過ごしている。そして、生徒のみなさんにも与えられた環境や力を無駄にせず努力できる人であってほしいと思いつけている。

思えば、個性豊かな先生方に薫陶を受け、その後の人生の根幹を築いたのは高校時代であった。各界で活躍なさっている諸先輩方のように、次世代を支える逸材が在校生からも生まれるであろう。在学中も教員になってからも、自分が母校の教壇に立つとは努め思わなかったが、このような機会に恵まれたからには己の能力の及ぶ限りのことをしたいと考えている。

勉強とは

小林 靖敏



私が大学生だった頃、何人もの友人が「高校時代は楽し

かった。あの頃に戻りたい。」と過去を振り返っていた。卒業し就職すると今度は、「大学時代が懐かしい。あの頃に戻りたい。」とボヤク友人も大勢いた。しかし、私には「過去に戻りたい。」という願望は全くない。この思いは、はたして「良い」のか「悪い」のか!?

私の高校時代は部活動中心の毎日で、入学して間もなく元々苦手だった理数系科目から分からなくなり、その後は中学時代に得意だった英語も授業について行けなくなり、更には国語まで……。授業の内容は全く理解できず黒板の文字をただノートに写すだけの毎日であった。これがどれほど辛かったことが、努力を怠った結果「浪人」することになり、学習時間は一日平均十時間、目標十三時間という地獄を味わった。

翌年、大学に合格すると一旦は様々なしがらみから解放されたが、学年が上がるにつれ、教師を志望していた私に「自分は教師になれるのか?」という不安が襲いかかり、教員採用試験に向けて勉強しなければならなくなった。試験

の結果は大学四年時に「不採用」、卒業後はいつかの高校で働きながら試験を受け続け、四度目で採用された。部活動の練習がある日は平均七時間、練習がない日は目標十三時間。二度目の地獄を味わった。楽しい思い出も沢山あったはずであるが、思い出されるのは前述した「辛さ」ばかりである。

しかし、このような「辛さ」を乗り越えたからこそ、今があるのであり後悔はしていない。「今が一番いい。」と思えている。

「勉強」という漢字を本来は、「べんごう」と読むようだ。「強」には、「むりやり」など強制的に何かをするような意味も含まれている。「やりたくなく」ても「嫌い」でも、「やるべき時」に、また「やらなければならない時」に「勉」めるのが「勉強」である。はじめをつけて、とにかく勉強してほしい。「生徒たちに私のような辛さを体験させたくない。」そう思いつつ、日々教壇に立っている。

下館一高に赴任して

大林 克



下館一高に赴任してまもなく一年が過ぎようとしています。

二年の副担任とバドミントン部の顧問として、日々勉強しています。

勉強といえば高校時代には高校の、大学時代には大学の、社会人には社会人の勉強があります。自分が高校生の時は、勉強に目的や意義を持つことより、周りの環境からか、勉強しなければという義務感のようなものが強くあったような気がします。振り返って考えるとその時期は思考と知識を磨く時期であったのかもしれないですが、当時はそんな考えに至るはずありません。

『勉強というものを、義務ではなく、生活にうるおいを与え、将来、社会に出たときに恩恵をもたらす事柄を学ぶすばらしい機会だと考えましよう。』

これはアインシュタインの言葉です。社会に出た今でこ

そ実感が湧きますが、高校生の時期ではなかなか実感が湧かないかもしれません、少しでも良い機会が作れるように努力していきます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

下館一高に赴任して

新里 康



境土木事務所という皆様には聞き慣れない所から下館一高に赴任してもうすぐ一年が経とうとしています。この土木(工事)事務所は県内に十二箇所あり、各管轄内の道路、河川、橋梁等の整備や管理等に関する業務を行っています。

私はその中で用地取得に関する業務を新規採用の時から四年間担当してきました。そして二箇所目の勤務地として下館一高に赴任しました。

これまで事業部門に携わっていた私にとって管理部門である総務、経理関係の業務は始めの頃は戸惑うことも多かつ

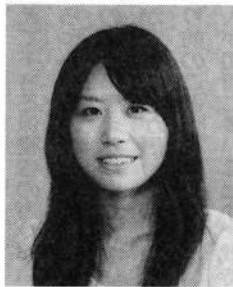
たのですが、皆様に助けていただきなんとかやっていくことができました。また、初めての学校勤務ということで不安もありましたが暖かく迎えていただき大変感謝しております。

思い返せば高校生の自分は決して良い生徒ではなかったように思います。生き生きとし、目標に向かって一生懸命な下館一高生を見てみると当時の自分に反省と後悔ばかりです。下館一高生の皆さんには限られた高校生活を有意義に後悔の少ないよう過ごしていただきたいと願っています。

伝統ある下館一高の発展のため全力を尽くしていきたいと存じますので、よろしくお願いたします。

下館一高に勤めて

谷中里佳



下館一高というと、伝統があり、勉強に部活動が盛んで素晴らしい学校というイメージ



ジがありました。実際働きはじめてみると、想像していたよりも活気に溢れており素晴らしい学校という事が分かりました。

生徒さんと多くは接してないのですが、進学や部活動、学校行事を見ていると、一人一人が夢や目標を持っており、何事にも全力で取り組んでいるように思います。このような姿を見て、私も考えさせられ、生徒に負けないように頑張らなくてはと、毎日ほりのある生活を送ることが出来るようになりました。

高校生活の三年間は、今後の人生を大きく左右する出会いや夢中になれるもの、夢を見つけられる時期だと思っています。そのような貴重な時期に、生徒たちと一緒に過ごせ日々の成長を見れることに幸せを感じています。

先生方や生徒のみなさんが少しでも有意義な学校生活を送れるように、日々努力していきたいと思っておりますので、今後ともよろしく願います。

訃報

平成二十一年度中に、次の旧師及び同窓生の方々が永眠されました。慎んで哀悼の意を表し、冥福をお祈りいたします。
(順不同)

十七回 鈴木 啓正氏
(元同窓会長)
旧師 勝村 恒雄先生
(元校長)
横瀬 杜美也先生
小谷野 光司先生

平成二十一年度 職員異動

一、退職者

校長 竹井 茂男
教頭 増淵 元明

教諭(体育)

加藤 哲男

非常勤講師(英語) 小曾野俊夫

非常勤講師(国語) 菱沼 郁雄

主事

増淵 里江

二、転出者

教諭(英語)

馬場 久

教諭(国語)

小川 信弘

教諭(理科)

大宮 栄

(筑波高校へ)

教諭(英語) 高橋 好文
(結城二高へ)
係長 大川 勝
(結城二高へ)

三、転入者

校長 宮本 節
教頭 柴山 希一
(下館二高より)

教諭(国語)

小林 靖敏
(古河二高より)

教諭(理科)

大林 克
(岩井西高より)

教諭(英語)

柴山 佳美
(古河二高より)

主事

新里 康
(境土木事務所より)

四、新採者

非常勤講師 柳橋 晃代

主事 谷中 里佳

平成二十一年度

紫西同窓会 幹事

全日制

一組 瀬端悠子 平本善寛
二組 横田晃平 渡邊雄太

定時制

川股伸浩 木村紘子

下館一高の進路指導の現状

進路指導部長 野澤 義男
(五十回卒)



【平成二十一年度入試概況】

平成二十一年度センター試験の志願者数は二年ぶりにわずかに増加し、全国で約五十四万四千八百人でした。そのうち、現役が約四十三万一千人、浪人が約十万人六千人、その他が約六千五百人でした。受験率は九三・三％で、過去十か年で最高を記録しました。総合平均点は、七科目総合(九〇〇

①平均点ダウンによる国公立大受験断念組の増加
五(六)教科七科目平均点(九〇〇点満点)が二・五点ダウン。現行課程センター試験中最低で、二次出願を取り止める者が多く出た。

②後期日程廃止・縮小大学・学部増加による受験機会の減少
難関大の医学部(医学科)を中心に後期日程廃止・縮小が続く。国公立大の実質一校受験化が進行している。

二次志願倍率の平均は、国立大で四・四倍、公立大で六・四倍で、国公立大では、四・八倍と、前年の四・九倍を下回りました。日程別でも、前期が三・二倍、後期は九・七倍と前年よりやや下降しました。また少数の公立大で実施される中期も一三・二倍と昨年より〇・六下回りました。

私立大学については、センター試験利用大学・学部の増加、センター試験利用入試の複線化・多様化、主要大学の学部増設、全学部日程入試や学部統一入試の導入、受験料割引・減額制度の導入などの要因で、志願者が増加しまし

た。国際・国際関係・外国語系、医療・看護系の人気が高く、志願者は難関校で減少し、準難関校で増加しました。

(センター試験データ等は旺文社『蜚雪時代』を参照)

【本校生(平成二十二年三月卒業生)の状況】

毎年夏休み中からエントリ―できるAO・AC入試(いわゆる自己推薦入試)や十月の推薦入試から受験が始まります。二十一年三月卒業生は、国公立大の推薦入試で、筑波大五名、県立医療大四名を含め全体で十三名合格という好成绩を残しました。また、私立大の指定校推薦で二八名、その他の自己推薦や一般推薦等でも十二名が年内に進路を決定しました。年が明け、二六二名がセンター試験を受験し、その後、二月・三月の国公立大学の二次試験の受験対策に取り組む一方で、一月末からの私立大学一般入試にも挑みました。二月の自由登校になってからも、私立大の入試の合間に課外授業や小論文指導などを受けるために、多くの生徒が登校し、最後の後

期試験まで諦めずに頑張りました。

センター試験の平均点が大幅にダウンした結果、慎重な出願と驚異的な粘りで、国公立大学合格者は百十一名(現役九八名)に達し、三年前に現役百名合格を果たした学年と並びました。これは担任団と生徒の信頼関係、そして生徒一人一人の懸命な努力のたまものです。この学年は一・二年で生徒指導に力を注い

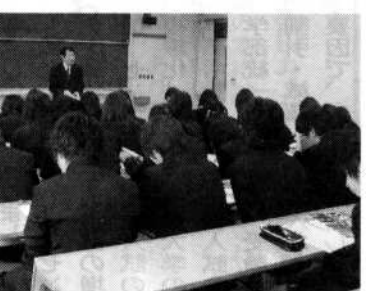
卒業生二七八名中、国公立大学進学者八二名、私立大学進学者一六一名・短期大学進学者五名・専門学校進学者六名、その他四名、「全人時代」に妥協せず捲土重来を期して浪人する者二十名という内訳です。浪人生ゼロという奇跡のクラスもありました。

【各学年の現状】

〈第一学年〉

一年生も入学から早くも一年が経つとじています。すっかり高校生活にも慣れ、勉強や部活動に積極的に取り組む姿が見られます。高校入學がゴールではなく、高校卒業・大学進学が目標だということ

学年の先生方を中心に学習指導・生徒指導等に取り組んでいます。進路関係では、一年生のところでも書きましたが、常に生徒の状況を把握するための面談や、夏休み中の大学オープンキャンパスへの参加及びレポート提出などを行いました。十月二十八日(水)



文理選択も決定し、各自の希望する進路の実現に向けて大きな一歩を踏み出そうとしています。

には、進路講演会を実施し、筑西市民会館でベネッセコーポレーションの森大輔先生をお招きして、「子どもと考える進路選択」という演題で約七五分間の講演をしていただきました。修学旅行も終わり、高校生活も折り返し地点まで

したり、大学の授業を実際に体験する模擬授業を受けたりしてきました。模擬授業では、専門分野の話を高校生向けにわかりやすく講義していただきましたので、興味深く臨めました。また、各大学とも研究施設や図書館の充実ぶりは、さすがに高校とは比べようがないほどでした。余談ですが、「学食(学生食堂)」の充実ぶりにも心を惹かれました。



また、十一月五日(木)には、「大学訪問」ということで、生徒全員がクラスごとに選択した七つのコースに分かれて、茨城大学・筑波大学・宇都宮大学・埼玉大学・茨城県立医療大学といった国公立大学や、私立の東京理科大学を訪問し、キャンパスを見学

こうした進路の行事等を通じて、生徒たちが各自の進路をより具体的に描き、その実現のためには何をすべきかが見えてくれば、と思います。今年度も全学年で毎月学習時間調査を実施しています。全体的に、徐々に学習時間は増えてきてはいますが、個人

トップレベルの難関大学へ合格した者や、公立大学を二校だけ受験し合格した者もいます。浪人生では一年間の努力が実って首都大学東京へ四名が合格しています。私立大学でも慶應義塾大学・早稲田大学をはじめ、いわゆるMAR

CH(明青立法中)に七七名(現役五六名)等、多くの難関大学へ合格しています。詳しくは後の表をご覧ください。実際の卒業後の進路状況は、

〈第二学年〉
昔から「中池み」の学年と云われる二年生ですが、そうならないようにと、日頃から

訪問し、キャンパスを見学

訪問し、キャンパスを見学